

## Enhancing Gender Awareness Through Korean Dramas

LA Euikyu

### 1 はじめに

近年、韓国でもフェミニズム運動が活発化し、若い世代の女性を中心にジェンダー・センシティブな感覚が広く共有されるようになった。2016年5月の「江南駅通り魔事件」<sup>1</sup>や同時期に梨花女子大学で起こった大学当局と対立する女子学生たちの籠城闘争<sup>2</sup>がきっかけとなっており、同年10月に出版され、のちに映画化された小説『82年生まれ、キム・ジョン』も韓国社会を大きく揺さぶった。

一方で日本においては2020年、感染症対策による在宅での余暇へのニーズが高まり、動画配信サービスを介し、第4次といわれる韓流ブームが始まった。『愛の不時着』や『梨泰院クラス』は南北問題や格差の拡大という韓国の社会問題への理解を深めるとともに、韓国において人権への関心が高まっていることを示す材料となったのではないだろうか。特に、韓国ドラマは女性視聴者が多いだけに、こうした「人権への関心」が「ジェンダー」問題から始まったのではないか。というのも、ドラマで取り上げられることが社会の変化の妥当性を反映するものだと筆者には思われるからである。

以上を踏まえて、本稿では、主人公やその仲間が「女性」にあたる属性を持ち、あるいは既存の社会秩序の中で弱者として位置づけられ、困難を抱えながらもいかに生きるかを模索する姿を描いて高評価を得た韓国のドラマを事例として、2018年放映の『別れが去った：マイ・プレシャス・ワン』と2022年に放映された『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』を取り上げたい。この二つの作品は、家父長制に強く根づいてきたこれまでの韓国社会を批判し、多様性を反映しながら政治的な正しさを、より積極的に取り入れ、現実を超える多様性を打ち出しているのが特徴である。さらに、本研究は2014年放映の『ミセン』を含め、3つのドラマを取り上げる予定であるが、本稿では『別れが去った：マイ・プレシャス・ワン』と『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』の二作品を論じる。2016年を境に韓国社会の「ジェンダー意識への変化」が浮き彫りになったと考えられる。しかも、「ジェンダー意識への変化」への影響には2000年代から現在までの韓国の社会的あるいは人口動態的な変化、すなわち核家族世帯の増加、女性の高学歴化や晩婚化、少子高齢化、終身雇用制の崩壊などが多少なりとも「女性のエンパワーメント」に影響していることも無視できないと思われるからである。

---

\* 福岡大学共通教育センター外国語講師

女性の不条理を暴いた先行研究では、主にドラマ作品の内容面に重点をおいて論じられている山下(2013)のように、韓国の「ジェンダー意識」に関して作品に表れたイメージに着目した研究はあるが、本研究では韓国の「恨(한:ハン)」という視座を通して「私たち(우리:ウリ)」という視座を通して「私たち(우리:ウリ)」の物語を編み直す可能性への糸口を見つけることで、常に「わたし」が他者との関わりによって揺り動かされる受動的な存在であることを浮き彫りにすることを目指す。その前段階として、本稿では韓国においては人々のマルチカルチャリズムの志向性が弱いため、現代韓流ドラマが意識変革のきっかけとなることを論じる。

## 2 「多文化共生」とは?

「多文化共生」ということばは、自国内の少数民族(エスニック・マイノリティーズ)の権利の保護を促進することによって、その国内の融和を図ることを目的とした政策の意味で使われることが多い。カナダやオーストラリアの国家の原理として多文化主義や、アメリカでの多文化主義なども殆どの場合、この用法に入る。特に、カナダは1988年に多文化主義法が成立し、制度的な整備が整えられているが、日本での「多文化共生」は主に、社会意識上の問題として唱えられていることが特徴である<sup>3</sup>。韓国も単一民族国家と血統主義の傾向が強いこともあり、2000年に入ってから東南アジアからの労働者の受け入れや「農村花嫁」としての女性の増加により、社会意識上への変革が求められるようになった。

「多文化共生」を考える上で大変重要なことは文化軸に関する「対立軸」が存在しており、その中で政治的不均衡(power-ubalance)の働きによって「マジョリティーマイノリティ」の関係が固定化されていることである。この対立軸には人種をはじめ、民族、性別、年齢、世代、アビリティなどがある。

「多文化主義」でいう「多文化」とは、一つには我々が様々な文化の対立軸の交点として生きていることを意味する。一人の人間を例にとってみれば、その様々な文化対立軸のすべてでマジョリティーの位置に立つということはおそらくないと思われる。逆にすべての対立軸でマイノリティであることもあり得ないだろう。「多文化」のもう一つの意味は、それぞれの対立軸は二項対立から成り立っており、対立軸を挟んだ双方の世界がそれぞれの文化を持つということである。つまり我々は、二項対立の一方の文化を生きているが、同時に他の文化を生きる者と共に生きていかなければならない。「多文化主義」では、この二つの意味の「多文化」の重層状況をどう生きるかを考える。そこでは、他者との間で暴力的にならないように「共同性や相互依存性」を持ちつつ共に生きる社会を創ることが多文化共生への着地点になるだろう。

ここで浮上する問題点が、日本と同様に韓国でも「多文化主義」への社会意識上、「自分たちの間にある差異について十分認識できずにいるため、マルチカルチャリズムへの内発的欲求が全体としては低いといえる」<sup>4</sup>ことである。それは、韓国の歴史的背景によるが、

「同化圧力にさらされ、差異を抹消されてきたのは、他ならぬ日本国籍者自身であり、一種の〈自己喪失〉状態が日常化/一般化してしまった結果、差異を尊重し合うことへの志向性ももてずにいる」<sup>5</sup>ことと相通じるだろう。

日本での韓国ドラマの人気は、2004年「冬ソナ」が日本の中年女性たちにノスタルジーを呼び起こし、それをきっかけとして旋風を巻き起こしたことは記憶に新しい。それにより、日韓の文化交流が活性化し、相互理解が可能になった点は評価すべきであるが、文化を規格化することで主に消費することに偏ったことは反省点として捉えねばならないだろう。

### 3 シスターフッドと個の狭間で：『別れが去った：マイ・プレシヤス・ワン』を中心に

この作品は2018年5月26日から2018年8月4日まで文化放送で放映された。50代と20代の既婚者と未婚者である二人の女性が同居を通して「夫と彼氏」との葛藤と結婚、そして妊娠をめぐる、「女性」の立ち位置をジェンダー視点から描いた。

まず、ソ・ヨンヒ(50代)はキャリアウーマンとして会社でもその能力が認められ、順風満帆な社会生活を送る中、パイロット(後の夫)と出会い、結婚し出産と同時に、会社を辞めて専業主婦の道を選んだ女性である。しかし、夫の浮気により、彼女の生活が一変し、夫との別居中、精神病を患い、引きこもり状態で世の中と断絶するに至った。

このソ・ヨンヒには韓国の典型的な女性像が描かれている。あたかも「良妻賢母」のように、結婚と同時に自分の人生を犠牲にしてまで、夫と子どものために一生懸命に献身してきた結果が、夫の浮気(=裏切り)により、自分がこれまで生きてきた存在意義が一瞬にして消えてしまう挫折感から精神的に崩壊する。そこから立ち直ることができず、不信感に晒され引きこもる中で、一人の女性、ジョンヒョ(20代)が突然、現れるのだ。彼女はヨンヒの息子(ハン・ミンス)の彼女で、彼との間の妊娠に気づき、悩んだ末にヨンヒの家を訪れ、自分を受け入れるよう「交渉」し、やっと条件付きでヨンヒはジョンヒョを受け入れ、一緒に暮らすことになる。

この場面では、同じ女性として「シスターフッド」を感じることができる。「女」だからこそ、妊娠したジョンヒョを門前払いすることができない。彼女の崖っぷちに立っている「辛さ」を分かち合えるのは彼氏の母であるヨンヒであった。年齢の差はあるものの、一人は「妻/母」として、もう一人は「娘/彼女」としてこの世に生きてきたにもかかわらず、最後は同じ「女」として生きているという「共有可能な物語」が存在していたことは注目に値する。

このドラマが印象深いのは、「女」に焦点を当てて物語が展開されていることだ。これまで韓国社会で「女」とは、経済的・社会的に誰かに従属し、「自分として」生きることより、常に犠牲が求められるとともに「〈自己喪失〉状態が日常化/一般化」されてきたと言っても過言ではないからである。しかし、このドラマにおける、「異質なもの」である二人の女性があたかも「女」であるという共通項を通して互いの存在に触発されるように、「束縛」

から解放されて「個」を再構築していく物語は大変新鮮だった。しかも、他者を通して、自己変革していく過程が巧みに描かれているのだ。単純に物語が「自分探し」に回収されず、突然現れたジョンヒョンを通して自己(ヨンヒ)を絶望の崖っぷちから救い出す、「女」の新しい地平を拓くべく、呼び掛けているような作品である。

#### 4 女性のエンパワーメントの実現:『ウ・ヨンウ弁護士は天才肌』を中心に

この作品は日本でもよく知られているものであり、韓国では2022年6月29日から2022年8月18日まで、民放テレビではなくケーブルテレビで放映され、人気を博した。この作品が人気を集めた理由とは、主人公であるウ・ヨンウの人物像が視聴者の心を惹きつけ、彼女の世界にはまることで、視聴者の心が癒されたからではないかと思われる。

このウ・ヨンウは天才的頭脳と自閉スペクトラム症を同時に持っている新人弁護士で、大手法律会社で生き残りをかけて闘う人物として登場している。しかも、第2節でも述べた「重層性」を体現していることだ。彼女は常に社会の中で「二重」のマイノリティとして生きている。

一つ目は、「障がい者」である。「自閉スペクトラム症」を抱えながらも、天才的な頭脳を發揮して韓国の一流大学を首席で卒業した。

二つ目は、「女性」である。特に、韓国社会は儒教の影響もあり、男尊女卑<sup>6</sup>が強い国でもあった。その固定観念から「女性」を解放するために韓国でも梨花女子大学を中心にフェミニズム運動が1980年代から活発に行われた<sup>7</sup>。

この作品は、ウ・ヨンウのエンパワーメントの実現とともに、真の「多文化主義」を実現しているところが大変評価に値すると思われる。これまで、マジョリティの「許容と譲歩」が日本社会の「多文化共生」実現のための限界性でもあったことがよく指摘されてきた<sup>8</sup>。常に社会で他者化されてきたマイノリティ側は自己変革だけを求められてきたが、そこから社会運動を通して自分たちの「声」を発信することにより、マジョリティ側は「譲ってあげる」という社会意識が強かったのではないだろうか。

大手法律会社に就職したウ・ヨンウをめぐる、最初は周囲の上司と同僚たちは彼女が障がい者であることに先入観や劣等感を持ったものの、弱肉強食の社会で彼女を徹底的に排除しようと考えたのだ。しかし、彼女の仕事に対する「情熱さや人間味」に逆に自分たちの価値観が間違っていたことに気づく。彼女の思いがけない想像力と臨機応変さはそれまで敵対視及び同情心に陥ってきた上司や同僚たちを驚かせ、自分たちの自己変革までに至る。

とりわけ、突飛な行動をとるウ・ヨンウが作品の中で、「クジラ」の話をよくする度に、最初は偏見の目を見た人たちもその世界を共有していくストーリーが展開されている。「禁じられた言葉、聞き取れない言葉、自分を抑圧する言葉」<sup>9</sup>を他者と共有していき、最後は他者(=マジョリティ)が揺り動かされ、自己変革にまで至る過程は、「アイデンティティを確立するよう強く求めてきた近代の〈呪縛〉が解ける」<sup>10</sup>大きなヒントになると思われる。

グローバル化により、世界は市場と資本に独占され、国民国家主義は弱まっていると言われる一方で、「競争主義と能力主義」が言説化され新たな境界を作っている。ここで非常に重要なことは、いかに「力のある側」が自己変革を実践し、「力のない側」と共に生きる社会を創造していくか、その物語を編み直していくことであろう。

## 5 まとめ

2016年以降、韓国で放映された「女性」を主人公にしたドラマを通して、これまで抑圧されてきた「女性」が自分の物語を編み直し、他者との関係を再構築し、最後は真の「多文化共生」への途に至る、女性の生き様を垣間見ることができた。要するに、「女性」が韓国社会の骨格をつくりかえす「主体」になりつつあると言えるだろう。

今後の研究課題として、韓国の「恨(한:ハン)」を位置づけた上、晩婚化・非婚化、そして離婚率の増加による「生活構造」の変化に伴う「女性意識の革命」に迫ることで韓国社会の実態をさらに浮き彫りにしたい。

---

## 注

<sup>1</sup> 2016年5月17日に、韓国ソウル瑞草区のカラオケバーのトイレで発生した、34歳の男性が面識のない23歳の女性を刺し殺した殺人事件である

<sup>2</sup> 発端は2016年7月28日、梨花女子大が「未来ライフ大学」という名の単科大学の新設を決定したことにある。これに反対する学生が学内デモに決起し、大学本館を占拠して座り込みを開始した。当局は警察権力1600人を投入して鎮圧を図ったが、学生は解散を拒否して籠城を続けた。闘いはネットを通じて卒業生にも拡大し、追い詰められた当局は8月3日に計画を白紙撤回した。

<sup>3</sup> 鄭暎恵(2003)『<民が代>斉唱』岩波書店、202-216

<sup>4</sup> 前掲書、217

<sup>5</sup> 前掲書、217-218

<sup>6</sup> 2014年放映した『ミセン』によく描かれている。例えば、セリフの中に「会社にとって働く母親は罪人も同然(子を持つ女性社員)」「そのどこがセクハラなんだ。気性の荒い女ばかりで困る」「女が淹れた方がコーヒーはうまい」など。

<sup>7</sup> チャン・ピルファ [ほか] (2006)『韓国フェミニズムの潮流』明石ライブラリー

<sup>8</sup> 米山リサ(2002)『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』岩波書店、羅義圭(2020)「日本社会で<多文化主義>を考察する意義」筑紫女学園大学研究紀要第15号

<sup>9</sup> 鄭喜鎮編(2021)『#MeTooの政治学：コリア・フェミニズムの最前線』大月書店、12

<sup>10</sup> 鄭暎恵(2003)、229

## 参考文献

(1) チャン・ピルファ [ほか] (2006)『韓国フェミニズムの潮流』明石ライブラリー

(2) 鄭暎恵(2003)『<民が代>斉唱』岩波書店

(3) 鄭喜鎮編(2021)『#MeTooの政治学：コリア・フェミニズムの最前線』大月書店

(4) 羅義圭(2020)「日本社会で<多文化主義>を考察する意義」筑紫女学園大学研究紀要第15号

(5) 山下英愛, 2013『女たちの韓流:韓国ドラマを読み解く』岩波書店

(6) 米山リサ(2002)『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』岩波書店